

# 『保元物語』『平治物語』に見る古活字版刊行事業の一端

## ― 第一種と第十一種を中心に ―

阿部 亮 太

### 要 旨

本稿では、古活字版『保元物語』『平治物語』全十一種のうち、慶長期の第一種と元和期の第十一種の伝本群を比較して両作品の刊行の実態を調査し、以下のことを明らかにした。

第一種について、まず『保元物語』『平治物語』が欠損活字を共有するため「共時に開版」されたとする川瀬一馬氏の指摘を追認した。そして、両作品は同一の植字盤・活字を用いて『保元物語』が先に刊行されていた。また、従来嵯峨本や観世流語本にのみ確認されてきた解版前の活字差し替え（部分異植字」とも）の事例が第一種にも確認でき、その目的は誤字訂正や版面の違和感の解消にあった。この検討から第一種の刊行は、①組版、②摺刷、③校閲、④誤字訂正（活字差し替え）、⑤……という工程を経て、各刷の山を区別せずに製本していたことが判明した。さらに、東洋文庫本の補写丁が製本工房で加えられたことも補足した。第十一種についても、欠損活字の共有から川瀬氏の共時開版説を追認した。また、該種には読者の読解を助ける活字差し替えの事例を見出し、両作品が元和期までに広範な読者層を得ていたことを意味すると考えた。

総じて『平治物語』よりも『保元物語』、第十一種よりも第一種の方が複雑な作業実態を示していた。それは、最初に『保元物語』を刊行して要領を得、『平治物語』は手際よく刊行できたという事情や、校閲の省力化と印刷の効率化（量産）のためだと考えられる。



## 一、『保元物語』『平治物語』の古活字版研究

中世を通して流動し続けた『保元物語』と『平治物語』の本文は、近世初期の刊行により落ち着いた。この時期の活字印刷による出版物は現在「古活字版」と呼ばれている。川瀬一馬氏によると、両作品は慶長―寛永年間に刊行された版種が十一種類確認されるという<sup>①</sup>。これは『平家物語』『太平記』の十五種類に次いで多く、時代の移行期における歴史観や文芸の継承という営為に『保元物語』『平治物語』も関与していたことを示唆する。

両作品の刊行事業を概観するために、川瀬氏の指摘を確認しておく。なお、引用の際には段組の書式を一部改め、版種、版種の特徴、『保元物語』の伝本、『平治物語』の伝本、の順に記した。またへゝ内はもと小字双行だが、並み字に改めた。

(ハ) 保元・平治物語 三卷 三冊

保元・平治物語も他の軍記物語と共に近世初期に於いて最も多く開版せられた。<sup>①</sup>この両物語は必ず共時に開版が行はれ、刊記等も平治物語の巻末にのみ附刻せられるのが常である。<sup>②</sup>平家物語太平記等に比して片仮名交り印本は極めて少く、大半は平仮名交り印本である事が注意される。なほ現存諸伝本中、平治物語に対して保元物語両種は未だ共時刊行と認む可き刻本を発見し得ないが、この方面に留意しつゝある間に次第に発見せられる状態であるから、又他日必ず補訂する事も出来ると思ふ。<sup>③</sup>次に大略推定刊行年代順に従つて種別を表示すると左の如くである。便宜両物語を対照して記載する。何れも流布本系統であるが、巻の分ち方は、其中第一・二・十種本保元物語のみは二巻に分ち、以下は凡て三巻本である。但し内容に就いては、第一・十種本が最もよく、

誤脱等少く、他の諸本は殆ど同一の本文を有する。

書誌字二ノ一至四、高橋貞一氏「保元・平治物語の諸本より疏布本の成立」参照

(一) 慶長中刊十行本。(第一種) へ<sup>④</sup> 每半葉十行。每行約十八字。字面の高さ約七寸七分。<sup>⑤</sup> 平家物語・徒然草・花鳥風月等同種活字印本多し。保元物語のみ二巻に分つ。目錄章段なし。但し、其の内容は三巻本と異なるなし。流布印本の祖となりしものなれば、後の諸印本の誤脱を訂正し得可きものあり。本書植版印行の際に於ける誤植を張紙又は呉粉等を塗抹して訂正の文字を捺印せる部分多し。)

保元物語―凶書寮尊藏二冊、原裝、朱墨書入・東京文理科大学旧藏、渡邊氏・東洋文庫冊分四・京都帝国大学上二冊、原裝紙存・猪熊信男氏冊上藏

(補訂題)  
(参照題)

平治物語―凶書寮尊藏三冊、原裝、朱墨書入、各冊見返・東京文理科大学旧藏、渡邊氏・成篁堂文庫上、次、二、原裝藏

(…中略…)

(二) 元和四年刊(片仮名本) へ<sup>⑥</sup> 元和四年刊、四周单边、無界、每半葉十一行片仮名交り。平治物語巻末に「元和四曆三月日 開板」の刊記あり。)

保元物語―成篁堂文庫原裝、印記あり・尊経閣文庫藏

平治物語―成篁堂文庫原裝、印記あり・尊経閣文庫・東洋文庫原裝、裝・栗田元次氏巻中藏

川瀬氏は、活字の細小化(每半葉10行・毎行18字から每半葉12行・毎行22字へ。傍線部④⑥)と版面の複雑化(無訓から付訓へ等。中略部分)という傾向を看取し、それを活字印刷文化の時間的推移(慶長から元和・寛永へ)と捉えて諸本の刊行年時順を推定し、体系化した(傍線部③)。氏の古活字版研究は基礎的かつ網羅的であり、軍記物語

研究においても、その代表作たる『平家物語』と『太平記』に関する当該分野は川瀬氏の研究を踏まえて着実に進展した<sup>③</sup>。その一方で、他の軍記物語における当該分野には同程度の進展が見られない。しかし、そもそも中世文学が近世以降も命脈を保ったのは、この古活字版刊行事業の功績が大きい。そして『保元物語』『平治物語』は古活字版が複数回刊行されており、その実態を部分的にでも解明することは、両作品、延いては中世文学を理解するための手がかりとなるはずだ。

本研究では『保元物語』『平治物語』の刊行事業の全体像を把握する手始めに、右の川瀬氏の指摘を基にその首尾たる慶長期の第一種と元和期の第十一種を調査対象とする。そして両刊種の版面を精査し、その刊行にかかる作業の実態の一部を明らかにしたい。古活字版の刊行の実態は不明な点も多いが、その隆盛期に絶えず生産され続けた両作品の伝本群は、その作業工程の一端を知るための好材料になり得るのではないか。無論、その先には両作品の文学史的意義を見据えている。両作品が近世初期に幾度も版を重ねたのはなぜか。各版種の刊行にはどのような工夫があったのか。こうした問いを念頭に、まずは第一種を分析する。

## 二、『保元物語』『平治物語』第一種は「共時に開版」されたか

第一種の調査では、以下の伝本を対象とした。なお、前掲の川瀬氏の分類のうち、『保元物語』の伝本「京都帝国大学<sup>上</sup> 澤<sup>冊</sup> 菅<sup>冊</sup> 文<sup>冊</sup> 庫<sup>冊</sup> 蔵<sup>冊</sup>」(京都大学附属図書館所蔵本。一般五—〇六／ホ／二貴。二巻二冊中、下巻欠)は異版、「猪熊信男氏<sup>冊上</sup> 蔵」は所在不明のため、本調査の対象外とした。

『保元物語』【一】内は本稿で用いる略称。配列は略称の五十音順。以下同)

- ・宮内庁書陵部所蔵本(書陵部五五七・六六) 二卷二冊【書陵部本】
  - ・筑波大学附属図書館所蔵本(ル一四〇―二) 二卷二冊【筑波大学本】
  - ・公益財団法人東洋文庫所蔵本(三―Ba―二五) 二卷四冊【東洋文庫本】
- 『平治物語』

- ・宮内庁書陵部所蔵本(書陵部五五七・六七) 三卷三冊【書陵部本】
- ・一般財団法人石川武美記念図書館成篁堂文庫所蔵本(『新修成篁堂文庫善本書目』へお茶の水図書館一九九二・一〇) 五八九頁・下段) 三卷三冊中、上巻欠【成篁堂文庫本】
- ・筑波大学附属図書館所蔵本(ル一四〇―七) 三卷三冊【筑波大学本】

川瀬氏は「この両物語は必ず共時に開版が行はれ、刊記等も平治物語の巻末にのみ附刻せられるのが常である」という(前節所引、傍線部①)。しかし、第一種には刊記がない。はたして、両作品の第一種は共時の開版といえるのだろうか。そもそも「共時」とはどういうことか。そこに関わる工房は幾つなのか。

この問題を解明するために、両作品で共有されている活字の存在に注目したい。川瀬氏は『保元物語』『平治物語』の活字が『平家物語』ほか複数の作品と「同種活字」であると指摘したが(同前、傍線部⑤)、本稿では少なくとも『保元物語』『平治物語』間に同一活字があるか否かを再検証する必要がある<sup>3)</sup>。そこで、同一活字と判断できる確かな事例、すなわち両作品に共通する欠損活字を取り上げ、『保元物語』『平治物語』第一種が「共時に開版」されたとする川瀬氏の説をより詳しく見てゆきたい。

たとえば、両作品の共有する連続活字「みな(三那)」はその好例だ。なお、本活字は両作品に複数の使用が確認でき、いずれを掲出しても差異は生じない。そのため、掲出箇所は無作為に選んだ。

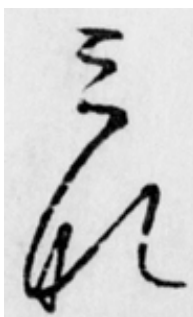
【事例1】連続活字「みな(三那)」

『保元物語』下32才8(下巻32丁表8行目。以下同)

(筑波大学本)

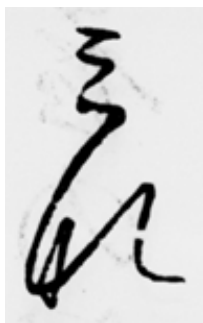


(書陵部本)

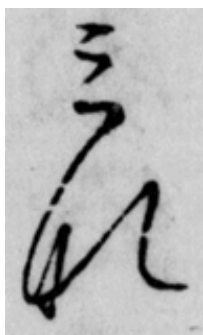


『平治物語』上56ウ10

(筑波大学本)



(書陵部本)

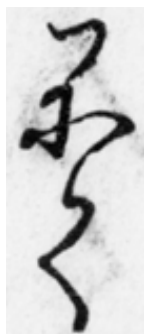


【事例1】では『保元物語』『平治物語』の筑波大学本と書陵部本を掲出した。「ミな（三那）」のうち、「ミ」から「な」への連続部分が二箇所欠損しており、加えて「な（那）」の「ㇿ」相当部、急角度で下ろされた一画の半ばも欠損している。墨の具合でわかりにくいところもあるが、右四本の活字はこれらの欠損を共有するので、いずれも同一活字と判断できる。よって、両作品は同一活字を使える環境（同一工房）で出版されたと考えてよからう。

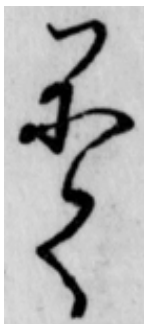
次に、連続活字「かく（閑久）」を掲げる。

【事例2】連続活字「かく（閑久）」

『保元物語』上66オ7

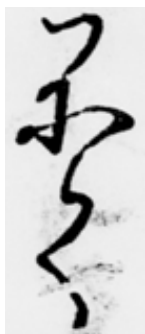


（筑波大学本）

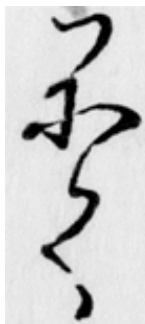


（書陵部本）

『平治物語』中31オ4



（筑波大学本）



（書陵部本）



【事例2】で興味深いのは、『保元物語』の二本は無傷の活字であるのに対し、『平治物語』の中31才4で初めて「く(久)」の最終画に欠損が確認され、以降の同一活字は全て欠損が確認されることである。この現象は、第一種では『保元物語』の後に『平治物語』が刊行されたこと、及び同一活字を(欠損の有無にかかわらず)襲用していたことを意味する。川瀬氏の共時開版説を言い換えるならば、まさに両作品は同一の活字を共有できる環境で、連続的に刊行されていたということになる。

最初期の古活字版刊行において、『保元物語』の次に『平治物語』を、いわば一対で刊行したのは、それ以前の両作品の享受のあり方に起因するように思われる。そもそも保元の乱(皇族の国争い)と平治の乱(臣下の謀叛)は構造の異なる戦乱であるにもかかわらず、同構造一対の事件のように認識され、『保元物語』『平治物語』はこうした歴史認識を基に成立している<sup>5)</sup>。以後、両作品は写本も一対で保存される傾向が強い。さらに、両乱は本格化する源平抗争の前哨戦として描かれ、ために『平家物語』の作品世界と併せて読むことで平安末期の動乱と武士政権の成立過程を学ぶことができる。つまり、事件の継起順に歴史を辿って軍記物語を読む場合は『保元物語』の次に『平治物語』を読むのが自然であり、こうした享受の実態が実際の刊行作業にも影響したと考えられる。

### 三、第一種の誤字訂正

本節では第一種に属する伝本群の版面を比較し、古活字版刊行事業の実態を調査する。最初に注目したい事例は『保元物語』における誤字の差し替えである。

【事例3】『保元物語』上12ウ5

（筑波大学本）

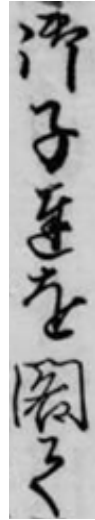


（東洋文庫本）



この事例の五文字目は筑波大学本と東洋文庫本が「閣」、書陵部本のみが「閣」としている。このうち筑波大学本は、後筆で門構え内の「合」を「各」に上書きしている。しかし「各」の上部を狭小な範囲に書き入れているために、筆が重なって中央の余白を潰し、所掲のモノクロ図版では見えにくい。従って、この上書き箇所以外の部分、門構えを右三本と比較しよう。すると、その左側の縦画下半分が、筑波大学本と東洋文庫本は太く、書陵部本は細い。同じく門構えの右側、最終画の縦画から左上への跳ねの形状を比べても、筑波大学本と東洋文庫本の活字は同一といえる。そして、この文字は「さしおき（て）」と訓読するべき文脈なので書陵部本の用字が正しい。従って、右三本の先後関係は、筑波大学本と東洋文庫本が先に刷られ、解版前の校閲を経て誤植が改められ、書陵部本が刷られた、と考えるのが最も整合的だろう。

（書陵部本）

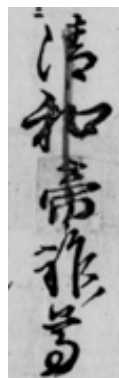


【事例4】『保元物語』上19オ3

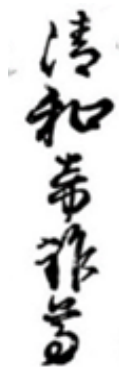
(筑波大学本)



(書陵部本)



(東洋文庫本)

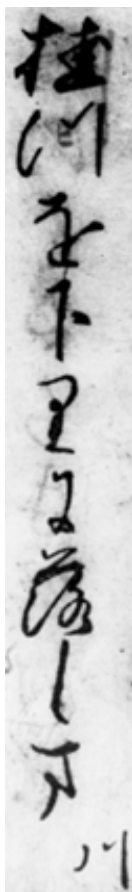


「清和帝祚尊」とあるべき文字列のうち、三文字目を筑波大学本は「常」と誤り、後筆で「常」の上に「ヒ」と見せ消ちにして行末に「帝」と補記してある。一方、書陵部本は三文字目を切り抜き「帝」に訂正している。そして、東洋文庫本は正しい文字「帝」が刷られている。この場合、書陵部本は筑波大学本と同じ誤りを犯した先出本文で、誤りのない東洋文庫本が後出本文だったと類推される。

【事例3】では書陵部本が、【事例4】では東洋文庫本が後出性を持つ。それは、古活字版における誤植訂正の事例が、必ずしも伝本自体の完成順を意味しないということだ。それでは、この問題をどう考えるべきか。今少し、同様の活字差し替えの事例を取り上げる。

【事例5】『保元物語』下5ウ2

(筑波大学本)



（書陵部本）



（東洋文庫本）



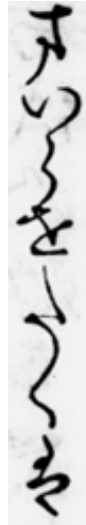
右の文字列の二文字目「川」には字形が二つ確認できる。筑波大学本と東洋文庫本では、第一画が外に膨らんでから右上に跳ねており、第三画の起筆部分（第二画と第三画の連綿）は欠損している。他方の書陵部本では、起筆から直下に下ろした筆が外側に回って第一画上部と交差し、第二画と繋がっている。いずれも「川」には相違ないが、筑波大学本では後筆で文字中央に「と」と見せ消ちにし、行末に「川」と書き入れてある。東洋文庫本にも第一画の上に訂正を意図したと思しき墨筆がある。

筑波大学本の「川」と同一の活字を筑波大学本『保元物語』『平治物語』内に探すと、『保元物語』に五例（【事例5】を含めない。上68オ3「角てはつゝゝるに」、下7オ9「思ひつるに」等）、『平治物語』に二十一例（上6オ1「つゝるてあらは」、中6ウ4「筑後守つ」と参て、下13ウ9「物をたつぬれ／は」等）を確認でき、いずれも漢字「川」ではなく平仮名「つ」としての用例だった。一方、書陵部本の「川」と同一の活字は筑波大学本の両作品に見出せなかった。加えて、同じ文字の異なる活字の字形をも参照する限り、第一種では、筑波大学本・東洋文庫本のような字形の変体仮名「つ（川）」と、書陵部本のごとき字形の漢字「川」が使い分けられていたと思しい。そうすると【事例5】の異同は、「桂川」が漢字表記であることを明確にするために書陵部本が「つ（川）」を「川」に差し替えたものとして理解できる。

但し、実はこの丁面は事情が複雑で、同じ版面の8行目「まいらせたくは」には東洋文庫本のみ孤立する【事例6】が見出せる。

【事例6】『保元物語』下5ウ8

(筑波大学本)



(東洋文庫本)



この文字列のうち、筑波大学本は連続活字「たく(多久)」を用いている(書陵部本も同じ。掲出略)。本活字は「く」の収筆が柔らかく直下に曲がって次の文字「は(者)」の起筆に近づく点で特徴的だ。しかし、他方の東洋文庫本では「く」の収筆部分が右下に鋭く伸び、「は」の起筆位置と離れている。両者は明らかに異なる活字である。しかも、この場合は連続活字が正に「たく」なのか、「たゝ」の誤植なのか、正誤を判じ難い(こういう判断は文脈に依拠すると思われる)。ゆえに、本箇所では筑波大学本と東洋文庫本の先後関係を判断できない。あるいは、東洋文庫本が先に刷られ、【事例6】「たく」を別の活字に差し替えて筑波大学本を刷り、さらに【事例5】「桂川」の漢字表記を明確化したのが書陵部本だと考えることもできよう。但し、この仮説では「たく」を別の活字に差し替えた理由が不明瞭である。

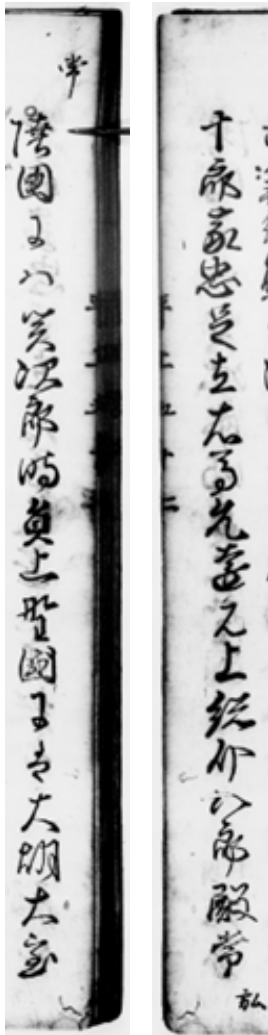
このように【事例5・6】は誤字訂正と断言するには躊躇される。高木浩明氏は、嵯峨本『伊勢物語』『方丈記』にも誤字訂正という考え方のみでは理解できない植字の差し替えを指摘する<sup>6)</sup>。この現象について、鈴木広光氏は嵯

峨本『伊勢物語』第一版の検討から「ことさらに字形の異なる活字を選択したり、新たに活字を制作したりしたのはなぜかといえば、それはおそらく、ある本と他の本が「別物」であることを主張するためであろう」と述べ、一点物の工芸品を志向した結果とし、第二版はさらに新たな版であることを主張したものとする<sup>7)</sup>。無論、嵯峨本『伊勢物語』の場合は異版同士(解版前と解版後の二種類の版面)の比較なので、嵯峨本ではなく、また同版同士の比較で見出された『保元物語』第一種の活字差し替えの事例と同位相で論じるには慎重を期すべきだろう。但し、両氏の研究によって「部分異植字」と呼ばれている如上の現象が、『保元物語』第一種では誤字訂正の事例として複数確認された点には注意を要する。

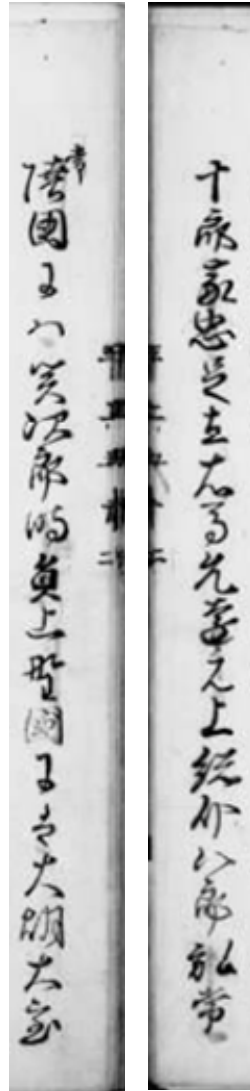
なお、誤字訂正といえる活字の差し替えは『平治物語』第一種にも一例を見出すことができた。

【事例7】『平治物語』上52オ10―ウ1

(筑波大学本)



(書陵部本)



【事例7】は丁の表と裏を跨ぐ文章で、武士の名寄せ部分である。筑波大学本には「上総介八郎殿常／陸国にハ」とあるが⑤、この行末に「弘」、次行の行頭に「常」と書き入れられ、「陸」の上には補入記号「○」が書かれている。つまり「……上総介八郎殿、常陸国にハ関次郎時貞、……」を「弘」「常」の誤脱とし、「……上総介八郎殿弘常、常陸国にハ関次郎時貞、……」という本文を是としていのである。一方、書陵部本の同箇所は「上総介八郎弘常／陸国には関次郎時貞」とし、「陸」の右上に「常」と墨書する。「常」の誤脱と見るのである。筑波大学本と比較すると、書陵部本の活字「殿」は「弘」に訂正されている。

いづれも「常」の目移りによる誤脱が想定される。それを訂正したのが書陵部本ならば、筑波大学本の「八郎殿」は書陵部本に先行する誤りだろう。筑波大学本が上総介弘常を「八郎殿」と誤った背景には、『保元物語』の「八郎殿」（鎮西八郎為朝）の影響があるかもしれない⑥。

以上、本節で扱った活字差し替えの多くは誤字訂正だった。そして、それらは伝本そのものではなく、丁毎の先後関係を示す。そう考えると、『保元物語』『平治物語』第一種古活字版の刊行の実態は、次のように想定されよう。すなわち、最初の組版で一定量を刷り、それを校閲して発覚した誤字を差し替え、刷り直した。あるいは、誤植を認定

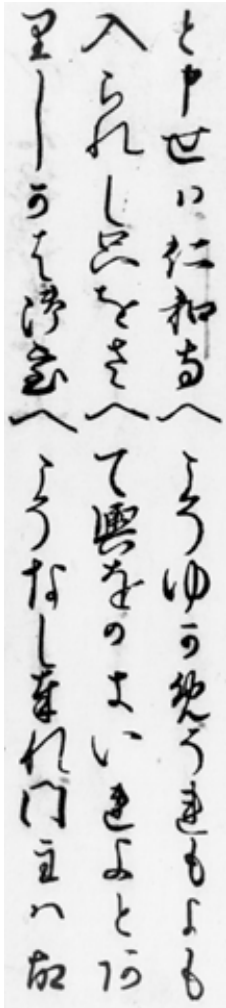
する以外の場合にも活字を差し替えた可能性がある。こうした作業は数度に及ぶが、いずれも一つの植字盤で、解版前に行われた。そして、その活字差し替え前の刷り貯めと差し替え後の刷り貯めは区別されず、適宜用いて製本されていた、と<sup>10)</sup>。

#### 四、第一種の版面の違和感とその解消

前節で取り上げた事例によると、『保元物語』『平治物語』第一種において部分的に活字を差し替える場合の多くは誤字の訂正を意図していた。しかし、活字の差し替えは別の目的によっても行われたらしい。その目的とは、版面に生じた違和感を解消することである。

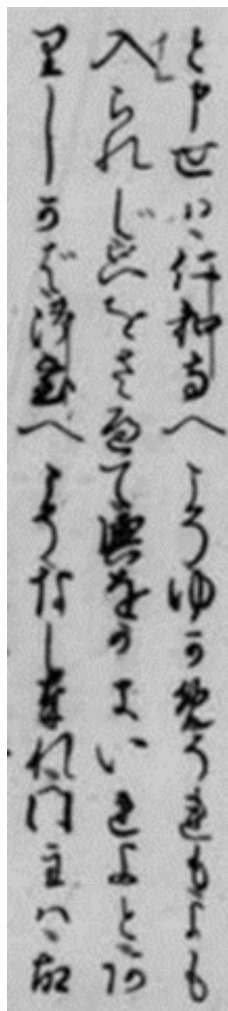
【事例8】『保元物語』上68オ5ー7

（筑波大学本）





(書陵部本)

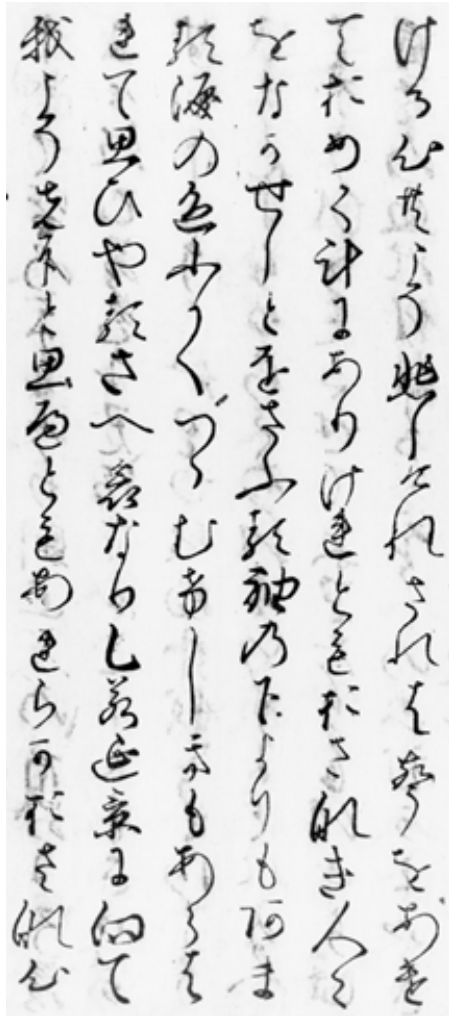


ここでは、筑波大学本が「へ(部)」を三行分横並びに配置する一方、書陵部本は6行目(掲載図版の中央行)のみ「へ(辺)」を用いている(東洋文庫本も同じ。掲出略)。この現象は、校正者が偶然横に並んだ三つの「へ(部)」に違和感を覚え、植字職人に指示して解版前に中央の活字を「へ(辺)」に差し替えさせて解消を図った、と考えられる。

同様の事例を挙げよう。

【事例9】『保元物語』下36才3―8

(筑波大学本)



けろ心其より始りされされを舞を舞を  
てたわく計よりありけきとをたされまんと  
をたわく計よりありけきとをたされまんと  
をたわく計よりありけきとをたされまんと  
をたわく計よりありけきとをたされまんと  
をたわく計よりありけきとをたされまんと  
をたわく計よりありけきとをたされまんと  
をたわく計よりありけきとをたされまんと  
をたわく計よりありけきとをたされまんと  
をたわく計よりありけきとをたされまんと

(東洋文庫本)

けろひ共う嬉しけれされも夢をあき  
てたゆく計ありけれとをたされまん  
をたうせりとをさふれ袖の下りも阿ま  
れ海の色少くつらむあしふもあは  
きて思ひや顔さへ喜ながらしあはれ白て  
我うえすと思へともあきらりたされ心

筑波大学本では、下36才3(掲載図版の最右行)「悲し／けれ(介礼)」と同4「あり／けれ(計連)／とも」の連続活字「けれ」が横並びになっており、また同7「思ひ／や／る／さ／へ(部)」と同8「思／へ(辺)／とも」の「へ」も隣り合っている(書陵部本も同じ。掲出略)。この箇所を東洋文庫本で確認すると、4行目の活字が「あり／けれ(介礼)」、8行目の活字が「思／へ(部)／とも」となっており、筑波大学本とは活字が異なる。つまり、東洋文庫本では字母の同じ平仮名活字が二箇所横並びになっているのである。これも【事例8】と同様に、横並びによる版面の違和感を解消したものと解するならば、いずれも同版だが、東洋文庫本を先の摺刷、筑波大学本・書陵部本を後の摺

刷と区別できよう。前節では誤字訂正を目的とした活字の差し替えについて複数の事例を確認したが、本節の【事例8・9】は正誤ではなく、同一の字母が横並びになるのを避ける傾向、書記に対する日本人の一般的な価値観に基づき差し替える点で質が異なる。こうした観点が設けられているのは、どうやら嵯峨本や観世流語本だけではないらしい。

但し、【事例8・9】のような版面の違和感を解消する活字の差し替えは、それほど徹底された方針ではなかったようだ。たとえば『保元物語』下4オ7ー9「の（乃）」、下13オ7ー9「に（尔）」の横並びは訂正されていない。『平治物語』第一種（筑波大学本・書陵部本・成篁堂文庫本）も、同じ平仮名の三つの横並びという現象は複数確認できるが（中1ウ4ー6「から」、下8ウ1ー3「し」等）、いずれにも活字の差し替えが行われた形跡はない。

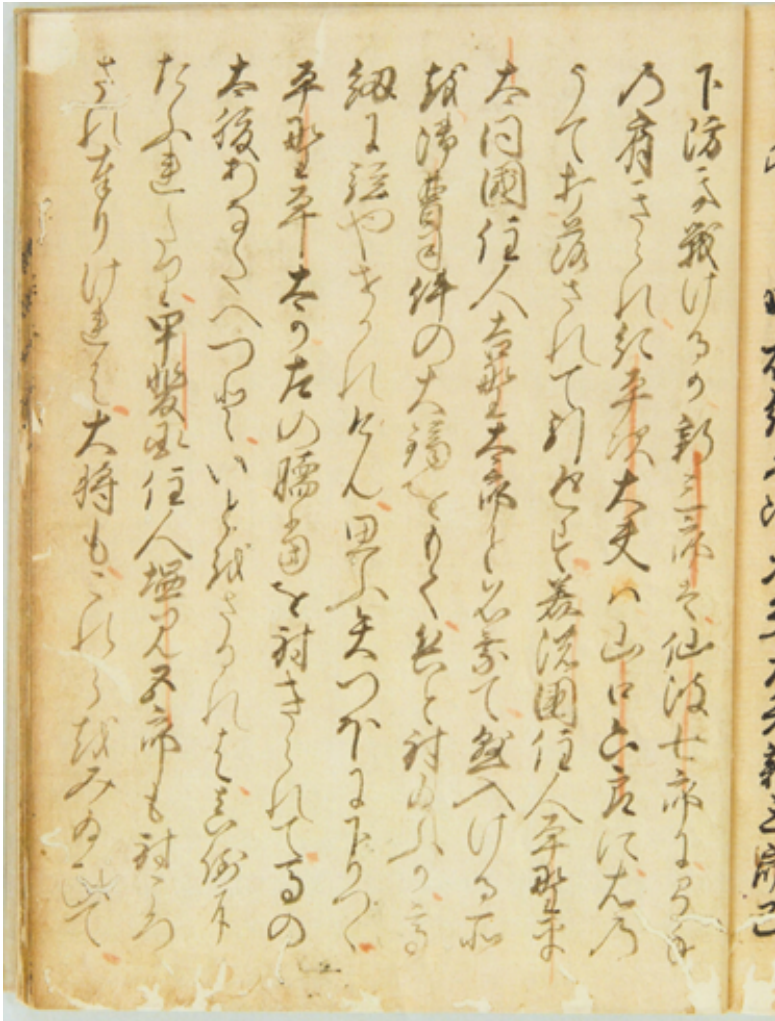
最後に、東洋文庫本『保元物語』の補写丁（上60オーウ）の問題を示す。該丁は基本的に他本の版と同じ書式（行数・字詰め・版心等）で書かれており、一見透き写しのようでもある。しかし、字母の異なる平仮名や字詰めのある行が散見する。この補写丁には、東洋文庫本の他丁に施されたものと同様の朱引きがあり、朱引きの時点で既に該本に備わっていたものである。それでは、この補写丁が加えられたのはいつか。結論から述べると、それは東洋文庫本成立当初より備わっていたと思しい。なぜなら、この丁の筆跡が第一種の字体と酷似しており、第一種の活字制作時に版下を手掛けた人物の真筆と考えられるからである。表の丁面を掲げる。

【事例10】『保元物語』上60オ

（筑波大学本）

下防不致けりの新三郎と仙波七郎と  
乃肩ふら建紀平次大吏と山は去来と右乃  
うて打落されて引返り義洪國領人平野平  
太田國領人吉野太康やるきて録入けり而  
紙汚費自件乃大福頭りく共と討めふり高  
叙に注やせりきけん思ふ矢以不目下里以  
つ平野平太り左此脇面討時切ら積る高乃  
右版はたたへつやねと新さ新さるる美海下  
さうれたり甲斐國領人堀見平康も討らる  
是種事りけき大將もこれら録みゆひて

（東洋文庫本）



筑波大学本と東洋文庫本の用字は基本的に同じだが、たとえば2行目の平仮名「れ」「は」「に」は字母が異なる。また、筑波大学本の6―7行目「思ふ矢つほに下りつ／＼平野平太か左の臍当を」は、東洋文庫本では「下りつ／＼」までが6行目に収まり、7行目冒頭が「平野平太」になっている。この現象は、既成の同丁の透き写しではなく、それを横に置き、時々平仮名や字詰めを変えながら、ある程度柔軟な態度で書写した結果だろう。その上で、幾つかの文字に注目して、筑波大学本の活字と東洋文庫本の補写の筆跡の特徴を比較する。

まず1行目「郎」は、偏「良」の上部は中央にあるものの下部がやや左に湾曲し、そのために空いた中央の空間近くに旁「卜」が書き始められる。「卜」の第一・二画は鋭く折れ曲がり、最終画の縦払いもやや反りつつ鋭い筆勢である。また、2行目「乃」も第一画の左払いは直線に伸び、上方に跳ねて第二画に移る。第二画の収筆は跳ねずに緩やかに流されている。同行「夫」の最終画の起筆が、第二画横画に接しながら第三画の左払いと交差する点も、強い筆勢といえよう。他にも材料はあるが、如上の文字の特徴は、筑波大学本の活字と東洋文庫本補写丁の筆跡とで、全て一致する。

少なくとも、東洋文庫本の補写丁の筆者は第一種の活字の書風を忠実に反映させている。これを後代の補筆と見るならば、前後の版面と補写丁の間に違和感を生じさせないために、相当腐心した書写ということになる。しかし、その書写態度は字母の異なる平仮名の使用や改行場所の変更といった前述の柔軟性とかみ合わない。時に僅かな変化を織り交ぜつつ、これほどまで似せて書写できているところを見るに、第一種の活字を作成する版下原稿の筆者と東洋文庫本の補写丁の筆者が同一であり、該丁が製本時に既に備わっていた蓋然性は極めて高いのではないか。この推測は、該丁の料紙（楮紙）が前後の料紙と同質のものに見做し得る点からも補強できよう。

五、『保元物語』『平治物語』第十一種は「共時に開版」されたか

第十一種の調査では以下の伝本を対象とした。なお、川瀬氏の挙げる『平治物語』の伝本「栗田元次氏<sup>巻中</sup>蔵」は所在不明のため本調査の対象外とした。

『保元物語』

- ・ 関西大学図書館所蔵本（一般C \* 九一三・四四 \* \* 一―一―一三）三卷三冊【関西大学本】
- ・ 国立国会図書館所蔵本（WA七―一六五）三卷三冊【国会本】
- ・ 一般財団法人石川武美記念図書館成篁堂文庫所蔵本（『新修成篁堂文庫善本書目』五九九頁・上段）三卷三冊【成篁堂文庫本】
- ・ 公益財団法人前田育徳会尊経閣文庫所蔵本（『尊経閣文庫国書分類目録』〈精興社 一九三九・一〇〉四五四頁・一四行目）三卷三冊【尊経閣文庫本】

『平治物語』

- ・ 関西大学図書館所蔵本（一般C \* 九一三・四四 \* \* 一―四―一六）三卷三冊【関西大学本】
- ・ 一般財団法人石川武美記念図書館成篁堂文庫所蔵本（『新修成篁堂文庫善本書目』五九九頁・上段）三卷三冊【成篁堂文庫本】
- ・ 公益財団法人前田育徳会尊経閣文庫所蔵本（『尊経閣文庫国書分類目録』四五五頁・三行目）三卷三冊【尊経閣文庫本】



・公益財団法人東洋文庫所蔵本 (三—A d—三五) 三卷三冊 【東洋文庫本】

・大阪府立中之島図書館所蔵本 (甲和／八四六) 三卷三冊 【中之島本】

第十一種は川瀬氏の指摘通り、刊記が『平治物語』のみに見られる。『保元物語』『平治物語』第十一種が「共時に開版」された一論拠だが、このことを両作品の同一活字の共有という側面から補強したい。

【事例11】第十一類『保元物語』『平治物語』の同一活字

国会本『保元物語』

①卷一3才6

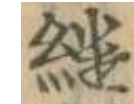
「理」

②卷一7ウ9

「隠」

③卷三15ウ10

「継」



関西大学本『平治物語』

④卷一11ウ2

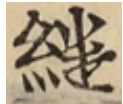
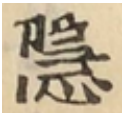
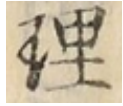
「理」

⑤卷一22ウ6

「隠」

⑥卷二8ウ11

「継」



該種は漢字片仮名交じりの本文で、漢字は基本的に楷書である。しかし、部分的には行書体も見受けられ、たとえば【事例11】①『保元物語』卷一3才6「理」は王偏が第二画から第三画にかけて円を描くような形状で、これは④

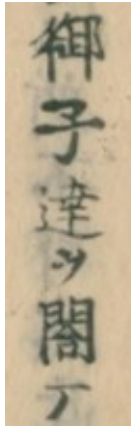
『平治物語』巻一11ウ2「理」と同一活字である。なお、この活字の特徴は、旁「里」の第一画(縦画)の収筆部分に下方への出っ張りがある点や、最終画(横画)が撓んでいる点にも指摘できよう。また、②『保元物語』巻一7ウ9「隠」は阜偏「阝」の縦画の欠損から、⑤『平治物語』巻一22ウ6「隠」と同定できる。さらに、③『保元物語』巻三15ウ10「継」も旁が行書体になっており、⑥『平治物語』巻二8ウ11「継」と同じ活字だ。このように、活字を共有する両作品は、同一の工房で極めて近い時期に刊行されたと考えられる。ゆえに、川瀬氏の指摘通り「共時に開版」されたといえよう。

## 六、『保元物語』第十一種の活字の差し替え

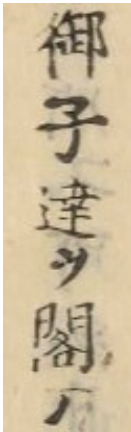
第十一種にも、第一種と同様に誤字訂正と思われる活字の差し替えが存在する。まずは『保元物語』を確認する。

【事例12】『保元物語』巻一8才4

(国会本)



(関西大学本)

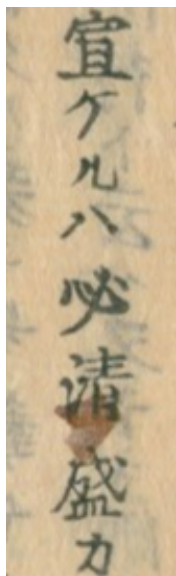


【事例12】は第一種の【事例3】と同じ箇所、偶然にも同様の異同が生じている。すなわち「さしおき(テ)」

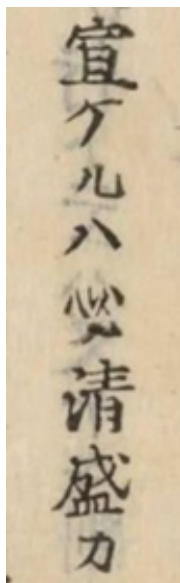
が国会本「閣」（成篁堂文庫本・尊経閣文庫本も同じ。掲出略）、対して関西大学本「閣」と異なる。注意されるのは関西大学本「閣」の門構えに欠損が生じている点だが、この活字は他所（巻一7オ9「関白ヲ閣テ」、巻三17オ4「嫡庶ヲ閣テ」）にも確認できる<sup>11)</sup>。また、第十一種では、今日の感覚からすると誤字と判断される活字が、類似する字形の活字として平然と使用される箇所も少なくない（巻三25ウ6「御曾（＝曹）司」、巻三28オ1「脳（＝惱）マサン」等）。要するに【事例12】は巻一第8丁の先後判定をする材料にはならない。

【事例13】『保元物語』巻二4オ5

（国会本）



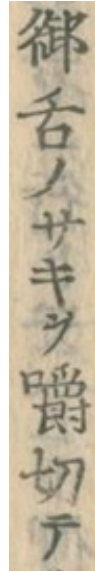
（関西大学本）



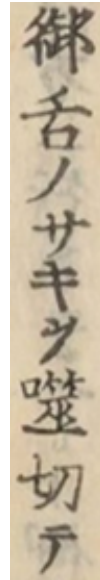
掲出した文字列「宜ケルハ必清盛力」のうち、関西大学本のみ「必」が欠損している（成篁堂文庫本・尊経閣文庫本は国会本に同じ。掲出略）。この欠損活字「必」も他所に確認でき（巻三14ウ10、同28ウ4等）、【事例12】と同じく先後関係を決し難い<sup>12)</sup>。

【事例14】『保元物語』巻二20ウ2

（国会本）



（関西大学本）



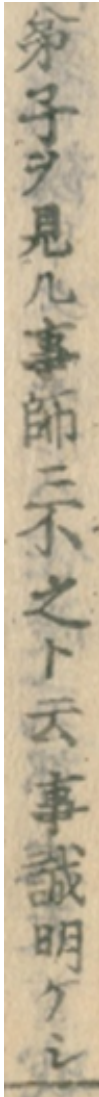
頼長が自殺未遂をする場面、第一種では下6オ9「御舌の前を食切て」（書陵部本）とする。この「食切て」相当部を国会本は「嚼切テ」、関西大学本は「噬切テ」とする（成筭堂文庫本・尊経閣文庫本も同じ。掲出略）。「嚼」「噬」は共に「くふ」と訓じるので誤りではなく、ここでも先後関係や活字差し替えの理由がわからない。

右三例によれば、第一種と同様、第十一種でも刊行者は一度組版してある程度刷り貯め、校閲の後に部分的に活字を差し替えて再度摺刷していたといえる。但し、第一種るときほど事例は多くなく、ともすると校閲の頻度は慶長期から元和期にかけて減ったのではなからうかと想像される。

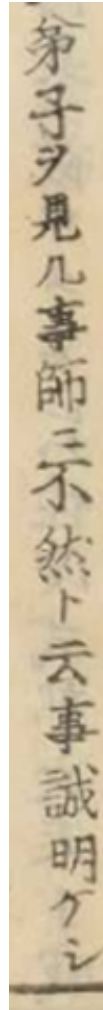
如上の検討だけでは、活字を差し替えた刊行者の意図を探りづらい。しかし、次の二例によれば、後の摺刷に携わった刊行者の意図が垣間見えると思われる。

【事例15】『保元物語』巻二23オ3

（国会本） 成筭堂文庫本も同じ。掲出略。



(関西大学本) 尊経閣文庫本も同じ。掲出略。

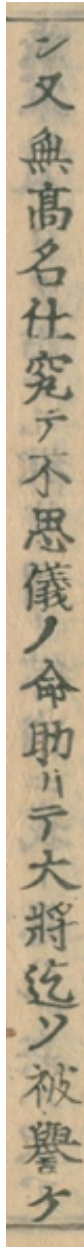


【事例15】は、国会本・成實堂文庫本「不之」と関西大学本・尊経閣文庫本「不然」に分けられるが、「しかな」と読ませるならば正しい用字は「不如」だ。つまり、いずれも誤字なのだが、一方が他方を修正する意図を以て活字を差し替えたのだろう。

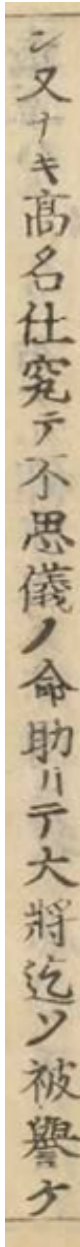
読者に配慮したと思われる事例もある。

【事例16】『保元物語』巻二11ウ8

(国会本)



(関西大学本)



これは白河北殿合戦で高間兄弟を討った金子家忠が、その剛気ゆえに為朝の攻撃を免れた場面の評言である。国会

本は「又無高名」(行23字詰め)とし<sup>8)</sup>、関西大学本は「又ナキ高名」(行24字詰め)とする(成篁堂文庫本・尊経閣文庫本も同じ。掲出略)。このように活字の差し替えにより字詰めが変動する場合、同行の字間に影響して次行に一字送る可能性も出てくるが、今回は一行に収まっている。このような無理をしてまで片仮名表記を選んだ関西大学本の刊行者は何を考えていたのか。推測の域を出ないが、国会本が先行し、その校閲の段階で「又無高名仕究」と六文字も漢字が連続しては読みにくいと判断され、以降は「無」を片仮名に開いたのではなからうか。国会本の文字列では「又、高名無く、……」等の誤読を誘発しかねないが、関西大学本の片仮名「又ナキ高名」では文意が定まる。このように、先の摺刷物を校閲して誤読の危険性を見付け、部分的に活字を改めて刷り直したのではなからうか。この現象は、元和期には第十一種の想定する読者層の読解力が、慶長期の第一種のそれを下回っていること、逆に言えばそれだけ読者層が拡大していたことをも意味すると思われる。

#### 七、『平治物語』第十一種の活字の差し替え

第一種と同様、『平治物語』第十一種にも『保元物語』と同程度の活字の差し替えの事例を見出しにくい。しかし、僅少なから注目すべき事例がある。

【事例17】『平治物語』巻二15才3―5

(中之島本)

覺ルソ今ハ何ヲカ期スヘキ討死セントテ被懸ケレハ鎌田馬  
 ヨリ飛テ下七寸ニ立テ申ケルハ昔ヨリ源平弓矢ヲ取テ何  
 毛勝負ナシト申セ共殊更源家ヲハ皆人武キ事ト申侍リ

(関西大学本)

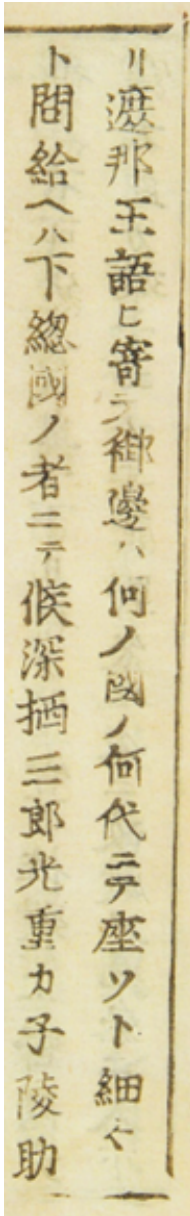
覺ルソ今ハ何ヲカ期スヘキ討死セントテ被懸ケレハ鎌田馬ヨ  
 リ飛テ下七寸ニ立テ申ケルハ昔ヨリ源平弓矢ヲ取テ何レ  
 毛勝負ナシト申セ共殊更源家ヲハ皆人武キ事ト申侍リ

中之島本（成實堂文庫本・東洋文庫本も同じ。掲出略）と関西大学本（尊経閣文庫本も同じ。掲出略）では、巻  
 二五オ3・4の字詰めが異なる。前者では3行目（掲載図版の最右行）―26字、4行目―25字、5行目―24字である  
 のに対し、後者では順に27字、25字、24字だ。3行目と4行目の相違点は、3―4行目に跨がる行文「鎌田馬ヨリ飛  
 テ」の「ヨ」の位置と、4―5行目に跨がる行文「弓矢ヲ取テ何毛勝負ナシ」の「何」の送り仮名「レ」の有無であ  
 る。但し、中之島本は後筆で「何」の右傍に「レ」と送り仮名を書き加えている。

これを先の【事例16】と併せて考えるならば、次のように推測されまいか。すなわち、4行目「何」は複数の訓が想定され、読者の誤読が危惧される。そのため「レ」を送り、訓を「いづ(レ)」に限定する必要が生まれた。しかし、そうすると4行目内に活字が収まらない。そこで3行目末「鎌田馬」周辺に用いていた込め物を取り除き、「ヨ」を4行目冒頭から3行目末尾に移した、と。3行目に込め物の映り込みはないが、第十一種で込め物を用いていることは他の箇所から確実である<sup>11)</sup>。本事例も、読者に読みやすい本文を提供しようと考えた刊行者が、中之島本のごとき配字を部分的に組み直し、関西大学本のような配字に改めたものと考えられる。

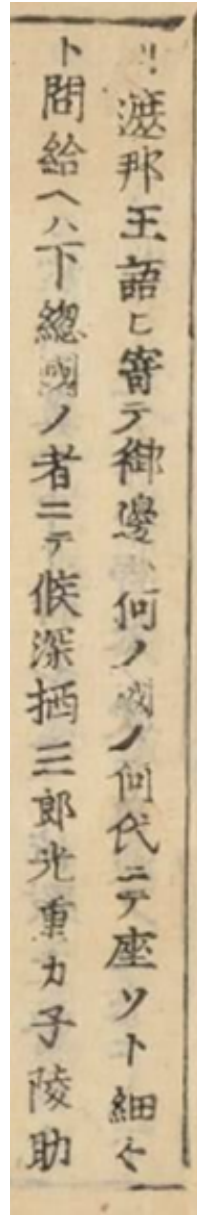
第一種には、版面の違和感を解消するための活字の差し替えがあった。しかし、管見の限りでは第十一種にそういう事例を見出せない。たとえば、下17オ3ー5「子(共/トモ)」や下34ウ4ー6「二」は横並びのまま。但し、第十一種は第一種に比して活字自体が小さくなり、また意匠を凝らした字体を採用しているわけでもない(片仮名なので字母が基本的に同じ)。そのためか、同一文字の横並びはそれほど目立たないのである。それでは、第十一種は版面の違和感を全く気にしないのか。

【事例18】『平治物語』巻三27オ1ー2  
(東洋文庫本)





(関西大学本)



【事例18】は活字の差し替えではないが、東洋文庫本では1行目末尾「細々」の下に比較的大きな空白がある（尊経閣文庫本も同じ。掲出略）。それが、関西大学本にはない（成篁堂文庫本・中之島本も同じ。掲出略）。この現象は、文字にかすれやぶれが見られず、単なる活字の動揺（摺刷の際のずれ）には見えない。前述のように第十一種は字間に込め物を用いるので、【事例18】はいずれの場合も込め物を利用してこの版面に確定したはずだ。それでは、そこにはいかなる意図が働いたのか。

これも憶測となるが、先行するのは字間を詰めて組版した東洋文庫本ではなからうか。こちらでは行末に比較的大きな込め物を入れて調整したが、実際に刷ってみると1行目末尾の空白がやや目立ってしまった。その違和感を解消するために、該行の各字間を調整して後に刷られたのが関西大学本だ、と考えてみるのである。要するに微調整だが、それほど美しくない活字を全般的に用いる第十一種（元和四年刊）でも、版面の違和感を全く気にしなかったわけではないようである。

## 八、まとめ

本稿では、『保元物語』『平治物語』が中世から近世に引き継がれる段階、古活字版の刊行時期に焦点を当てた。そして、両作品の刊種については川瀬氏の分類全十一種のうち、第一種（慶長期）と第十一種（元和期）における刊行の実態を調査し、両作品と古活字版刊行事業の関係、作業工程の実態をできるだけ鮮明にしようと試みた。その結果、以下のことが明らかとなった。

第一種『保元物語』『平治物語』は、川瀬氏の指摘通り、共に刊行されていた。すなわち、同一工房内で同一の植字盤・活字を用い、『保元物語』を先に、『平治物語』を後に刊行していた。

また、従来一括して認識されてきた第一種内にも、伝本毎に相違が見られた。その相違とは、解版前の部分的な活字の差し替えであり、誤字を訂正する目的や、版面の違和感を解消する目的を見出せた。こうした問題は従来、嵯峨本『伊勢物語』や観世流謡本のごとき美術品・工芸品に属する作品の刊行の実態として注目されてきたが、慶長期刊行の『保元物語』『平治物語』第一種でも検討すべき問題だったといえる。

さらに、両作品の第十一種にも同一活字の共有を確認し、川瀬氏の共時刊行説を追認した。また、該種でも活字の差し替えの事例を複数確認できたが、特に字形の似ている活字を流用し、文脈に任せて読ませてしまう事例があるため、正誤・先後関係の判定、さらに刊行者の意図を探るのが難しい。しかし他方で、用字への拘りや版面の違和感への対処も窺える。要するに、第十一種の刊行方法や刊行者の意識には、第一種のそれと相通じる側面が残っていたのである。さらに、第十一種の活字の差し替えには読者が読みやすいように配慮したものや、原因不明のもの等もあった。このうち読者への配慮という性格からは、元和四年までの度重なる刊行により、『保元物語』『平治物語』が既に、

必ずしも高い教養・読解力を前提としない広範な読者層を獲得していたという時代背景が窺えよう。

但し、第十一種の活字の差し替えの事例は第一種ほど多くない。ここからは校閲の回数の変遷を想定できるのではなからうか。古活字版が一度の組版で何部刷られるのかは不明だが、先行する印刷物を刷り貯め、校閲・改訂を経て次の摺刷、また校閲・改訂して三度目の摺刷……という手順で刊行していたことはたしかだ<sup>15</sup>。その校閲の頻度は、第十一種よりも第一種の方が多かったと考えられる。この慶長期から元和期にかけての校閲の回数の減少は、印刷の効率化（量産の目的）と解せよう。そして、第十一種が漢字片仮名交じりを採用したのも、字母を複数持つ平仮名よりも版面に違和感が出にくいため、すなわち校閲の省力化のためではなからうか<sup>16</sup>。ここで川瀬氏の「平家物語太平記等に比して片仮名交り印本は極めて少なく、大半は平仮名交り印本である事が注意される」という指摘（第一節所引、傍線部②）を振り返るならば、『平家物語』『太平記』に比して小規模な『保元物語』『平治物語』では校閲の負担が比較的軽く、そのために平仮名での刊行を長期間行えた可能性、そうした状況下における『保元物語』『平治物語』の需要のあり方との関連の可能性も考えてみる必要がある。

また、活字差し替えの事例が『保元物語』に多く『平治物語』に少ないという傾向も看取された。本調査には伝本の現存状況による限界もあろうが、今回確認した範囲では『保元物語』の方が活字の差し替えの頻度が高く、複雑だったといえる。この傾向からは、最初に『保元物語』を刊行して要領を得、『平治物語』では手際よく作業ができた、という事情が考えられよう。

なお、第一種・第十一種は共に、製本する際にはその各刷の山を区別せずに製本していたようだ。そのため現存本では、各丁の先後関係は推定できても、伝本毎の成立順までは明らかにできない。これも本調査で得た刊行の実態に関する一側面である。

以上、『保元物語』『平治物語』の第一種と第十一種を検討し、古活字版事業の一端を垣間見た。両作品には、この間に第二十種という膨大な数の古活字版がある。今後はこれらも調査し、新しい時代に両作品が生まれ変わる様相を追究したい。

〔注〕

- (1) 川瀬一馬氏『増補古活字版之研究』第二編第八章第二節「国文学書活字開版の概観と其の種類」のうち「(四) 軍記物語」の(六)項(ABAJ 一九六七・一二。初版安田文庫 一九三七・六) 上巻五三九―五四二頁。
- (2) 注1前掲論文。
- (3) 小秋元段氏『増補太平記と古活字版の時代』(新典社 二〇一八・三。初版二〇〇六・二〇)、高木浩明氏『中近世移行期の文化と古活字版』(勉誠出版 二〇二〇・二)等。
- (4) 川瀬氏は成簀堂文庫蔵無刊記本『太平記』(慶長七年刊)の活字について「右の刻本(古活字版『太平記』慶長八年刊本―引用者注)と同種の古拙なる活字」が用いられていると指摘し、その刊行者を慶長八年刊本と同じく五十川了庵とした(注1前掲書第二編第四章第三節「徳川家康の開版事業」二。二二三頁)。後の小秋元氏も両本の活字を同一とし、川瀬氏の論を支持した(注3小秋元氏前掲書第一部第三章「慶長七年刊古活字本の本文をめぐって」、初出『日本文学誌要』六〇号 一九九九・七)。このように、複数の古活字版から同一の活字を見出す作業は、古活字版の生まれる環境を知る上で重要である。なお、川瀬氏の用語「同種活字」の概念規定については、近年、高木氏「同種活字とは何者か?」(『日本古書通信』第一一二六号 二〇二三・五)等が見直しを行っている。

- (5) 拙稿「認識としての「保元・平治」―物語は院政期の動乱をいかに捉え直すか―」(『国語と国文学』九四卷四号 二〇一七・四)、「認識としての「保元・平治」追考―『平家物語』の用例を中心に―」(延慶本注釈の会編『延慶本平家物語全注釈 別巻』汲古書院 二〇二一・一)。
- (6) 注3 高木氏前掲書第二章「嵯峨本『伊勢物語』書誌考証」(初出『ビブリア』一三三号 二〇〇五・五)。  
高木氏はこういう現象を「植字工の遊び心がかいま見えるようでもある」(三三五頁)と述べる。
- (7) 鈴木広光氏『日本語活字印刷史』第一部第1章「嵯峨本『伊勢物語』の活字と組版」(名古屋大学出版会 二〇一五・二。初出『近世文芸』八四号 二〇〇六・三) 五八頁。
- (8) この「常」は【事例4】『保元物語』筑波大学の「清和常祚尊」の三文字目と同一活字である。
- (9) 類例には、古活字版の覚一本『平家物語』卷九「梶原二度懸」における「昔八幡大菩薩後三年ノ御戦イニ」の傍線部が「八幡殿」(源義家)の誤りだという指摘がある。但し、これは古活字版の底本(梵舜本・写本)の段階で既に起きていた誤写を引き継いだものとされる。この類の誤りは刊写の別を問わないといえよう。注3 高木氏前掲書第五章「『平家物語』古活字覚一本についての覚書」(初出『軍記と語り物』四四号 二〇〇八・三) 二四五―六頁。
- (10) 表章氏『図説光悦謡本 解説篇』第二章―「特製本(㉠)と特製異植本(㉡)」(有秀堂 一九七〇・一〇)では、『姨棄』の異植字について「たまたま本書の異版部分の印刷枚数が足らず、後に改めて版を組んで刷り直したものであろうか」と異植字部分の後出性に言及した(七二頁)。これについては伊海孝充氏「光悦謡本帖装本再検―版式・分類・刊年・刊行者の諸問題―」(『能楽研究』四六号 二〇二二・三)が批判し、むしろ「特製本」と「特製異植字本」は極めて近い時期の刊行であり、区別するほどではなからうとする異説を唱えた。

なお、高木氏「異植字版とは何者か?」「異植字版とは何者か?その2」(『日本古書通信』第一一二七／  
一一二八号 二〇二三・六／七)も参照。

(11) 注7 鈴木氏前掲論文でも、活字の欠損は活字の差し替え・交換の必要条件ではない趣旨の指摘をしている(五六頁)。

(12) 活字の差し替えではなく、同一活字の欠損から先後判定の可能な事例はある。たとえば『保元物語』巻三14オ  
2「重祚」は、成篁堂文庫本と尊経閣文庫本が「祚」の最終画(旁「乍」の三本目の横画)を欠くため、そ  
の後出性が確かめられる。

(13) この「無」は「𠄎」の第三画を欠損しており、同一活字として『保元物語』巻一3ウ3、巻一5オ6、巻二11  
ウ8等を確認できる。

(14) 巻一21オ7「右<sup>■</sup>」、巻二12オ4「即<sup>■</sup>」、巻三16ウ10「知<sup>■</sup>」の「<sup>■</sup>」箇所等。

(15) 橋口侯之介氏「彫師・摺師から見た日本の出版形態」(藤本幸夫氏編『書物・印刷・本屋―日中韓をめぐる本の  
文化史』勉誠出版 二〇二一・六)によると、古活字版の刊行は「百部ほどを限度に一葉を組んで印刷し、摺つ  
た後は組版を崩して、必要な文字は次葉以降にも再利用するという方法だったため、増刷するには活字をも  
う一度組み直さなければならなかった」(五二五頁)という。

(16) 本稿では平仮名・片仮名の区別に関して刊行者側の事情を考察したが、当然ながら読者側の事情も考慮する必  
要がある。たとえば、今西祐一郎氏「片仮名版と平仮名版―江戸時代出版の一風景―」(『東方学』一四六  
輯 二〇二三・七)は、仮名表記が江戸時代に認知されていた書物の「階層性」や、挿絵の有無、読者の獲得  
の問題と関わることを論じている。

【付記1】 本稿の調査では、国文学研究資料館国書データベース（第一種：筑波大学本『保元物語』『平治物語』、書

陵部本『保元物語』、第十一種：関西大学本『保元物語』『平治物語』、国立国会図書館デジタルコレクション（第十一種：国会本『保元物語』）、公益財団法人東洋文庫HP・東洋文庫全頁DB岩崎文庫（第一種：東洋文庫本『保元物語』、第十一種：東洋文庫本『平治物語』）、大阪府立中之島図書館「おおさかeコレクション」（第十一種：中之島本『平治物語』）等のデジタル公開された画像データベースを利用した。掲載図版のうち、筑波大学本は掲載許可申請後に提供していただいたオリジナルデータ、【事例10・18】は東洋文庫での原本調査時に複写を申請したカラー写真、その他は全て上記の画像データベースに拠った。原本閲覧及び図版掲載を許可して下さった諸機関には、ここに記して深謝申し上げる。

【付記2】 本稿は、高木浩明氏代表の国文学研究資料館・共同研究（一般）「国文学研究資料館所蔵マイクロ・デジタル資料を利用した古活字版総合目録作成の試み」の成果の一部である。

